

生涯音楽学習としての大学公開講座の意義と課題

—広島大学公開講座『合唱の喜びを分かち合おう』を事例に—

小 坂 光

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)

伊 藤 真

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

Significance and Problems with University Extension Courses from a Lifelong Music Learning Perspective: A Case of Hiroshima University Extension Course “Let’s enjoy chorus”

Hikari KOSAKA

Shin ITO

Abstract

To train as lifelong music learners, learners need to clarify the relationship between learning motivation and behavior. This study clarifies the relationship between learning motivation, enjoyment of learning, and active involvement/volition (effortful study and willpower to continue studying) in lifelong music learning by taking the Hiroshima University extension course “Let’s enjoy chorus.” Then we show the significance and problems with lifelong music learning in university extension courses. The targeted extension course is held for the public, even as a formal chorus class for music students and non-music students. Most of the learners in the extension course were in their 50s to 80s, and many of them had participated every year for more than three years. A questionnaire survey for 39 learners in the extension course was conducted. The questionnaires were constructed using three measures of “motivation” with five subscales, “enjoyment” with three subscales, and “active involvement/volition” with two subscales. Because of the examination, the motivation of “self-improvement orientation” had an impact on the enjoyment of “diverse thinking,” and the enjoyment of “knowing” had an impact on “volition.” Conversely, the motivation of “friendship orientation” did not affect any of the enjoyment factors. The findings suggest some significance and problems with music learning in a university extension course. The significance: lifelong learners can possess and develop the wisdom to respond to every situation in/out of music and have expertise in life when they participate in musical activities, acquiring new knowledge and experience they have never had before. The problem: coordinated efforts that encourage learners’ friendship orientation, for instance, by setting up an environment that encourages them to be active with others, are needed to make co-learning between lifelong learners and university students possible in a university extension course.

1 はじめに

今日の生涯学習社会において、生涯にわたって音楽に関わったり、音楽を学んだりすることは、人が自身の力で潜在的な能力を引き出し、主体的に学ぶ存在として生きていく必要性を示す「Learning to be」を芸術的側面から実現するひとつの方法である。この Learning to be（人間として生きることを学ぶ）という概念は1972年のユネスコ教育開発国際委員会の報告書（フォール報告書）に遡るが、その後現在まで我が

国の生涯学習推進に大きな影響を与え、音楽学習の文脈においても学習者個人の学びを他者と自己との相互行為のなかで豊かに更新し続ける在り方が求められている⁽¹⁾。このような音楽の生涯学習の形態は非常に多岐にわたるが、大学が一般市民に施設や講義を広く提供する公開講座は、地域の大学が有する教育資源を学外者に向けて開放するという点において、大学にとっては社会貢献としての意味をもち、また一般市民にとっては近隣の教育・研究機関である大学を活用して自らの教育ニーズに応じた生涯学習を実現する選択肢を得る利点がある。文部科学省は、大学が知の拠点として一般市民の生涯学習を支え、地域や社会の新たな価値の創造に貢献する必要性があること、また同時に大学が地域に支えられる機関としての地域を築くことを説いている⁽²⁾。平成29年度の文部科学省の開かれた大学づくりに関する調査においても、地域社会に対する大学の貢献の取り組みとして、公開講座を実施している大学は調査に回答した646校の97.1%にのぼる⁽³⁾。専門教育ではない生涯学習としての音楽学習は、一般に地域の音楽教室や生涯学習施設の同好サークル等で行われることが多いが、上述した大学側と一般市民側のそれぞれの利点から大学における公開講座を活用した音楽学習もさらに活発に展開・活用していくことが望まれる。一方で、一般市民を対象とした生涯学習は学習者の多様なニーズ、すなわち成人に特有の学ぶ目的や学習者のライフスタイル、ライフステージに応じた取り組みが必須である。例えば、成人の合唱団の調査を行った伊藤ほか(2014)は、長期にわたる継続的な学習によって音楽の専門的学習から人間関係の構築へと学習動機が移行し、学習が生涯活動化することを明らかにしている。また、石川(2009)は学習者が成人であるがゆえ指導者に対する気遣いや遠慮が生じ、学習者が本来学びたいことが実現しない場合があることを指摘している。子どもの学習に限らず、生涯学習を企図した教育機会を創出する際には、学習者理解に基づいた学習目標・内容の設定や指導法の吟味を行うことが必要である。大学公開講座は対象となる一般市民に向けて計画されたプログラムもあれば、大学の講義を一般市民にも開講するものもある。とりわけ、後者の場合には、大学生の学びと一般市民の学びには必然的にずれが生じることが予想され、そのずれをどのように解消し、双方にプラスに働くような学びを実現していくかが課題となる。

さて、生涯学習を進めるうえで、学習者理解をすること、すなわち学習者の学習動機や継続の根拠を知ることが、学習者の継続意志を強めたり、学習者の裾野を広げたりすることにつながるため、生涯学習研究においてもそれらの調査研究が重要となる。例えば浅野(2002)は、放送大学の学生と一般の大学生を対象に学習動機の研究をおこなっており、「交友志向」「自己向上志向」「経験関与的課題志向」「職業・専門性志向」「特定課題志向」の5つの志向を得ている。また、浅野(2006)では、学習動機と学習の楽しさ、生涯学習参加度の関連について研究をおこなっている。学習の楽しさに関する因子は「実用的楽しさ」「多様思考の楽しさ」「知る楽しさ」の3因子となり、生涯学習参加度の因子は「積極的関与」「継続意志」の2因子となった。共分散構造分析による因子同士の関連性をみると、「自己向上志向」が「知る楽しさ」や「多様思考の楽しさ」に正の影響を与え、「特定課題志向」「経験関与的課題志向」「職業・専門性志向」が「実用的楽しさ」に正の影響を与えていた。さらに、「多様思考の楽しさ」が「継続意志」と「積極的関与」に正の影響を与えていた。

以上のように、生涯学習として大学公開講座の果たす役割とそのような学びの場に参加する学習者の学習動機や学習達成を関連づけて、大学が一般市民に提供する生涯音楽学習の在り方を探究することが必要である。そこで本稿では、広島大学公開講座『合唱の喜びを分かち合おう』を事例としてとり上げ、そこに参加した学習者の学習動機、学習の楽しさ、および生涯学習への積極性・継続性がどのように関連しているのかを明らかにし、大学公開講座の生涯音楽学習としての意義と課題を提示することを目的とする。事例とする公開講座で行われる合唱活動は、音楽経験の少ない人でも取り組みやすいことから学習者の裾野が広く、生涯学習として位置づきやすい性質をもつ。また、複数の学習者によって活動することを前提としており、活動に参加している学習者の動機や継続の根拠はさまざまである。とりわけ事例とする公開講座は大学生を対象とした合唱の授業に一般市民が参加する形態で進められることから、大学生と一般市民の相互作用から生じる効果や課題という面からも大学公開講座の在り方について検討ができる。

2 公開講座について

広島大学では毎年20講座程度の公開講座が開講される。調査を行った2019年度は学校教育、防災、異

文化コミュニケーション、食生活、輸送機器工学、数理学、経済学、生物学、健康学、法学、文学など多様な領域から計 19 の講座が開講された。音楽領域からは本稿でとり上げる合唱の講座『合唱の喜びを分かち合おう』が唯一であった。この講座は、一般市民に向けた公開講座であるが、大学の専門科目の合唱の授業を履修する学生、および教養科目の合唱の授業を履修する学生と合同で展開される、特殊な形態をもつ。公開講座に参加する学習者の年齢層は 50 代～80 代が中心であり、3 年以上継続的に参加している人も多い。大学の授業として履修している学生の参加動機はいわゆる「単位取得を目的とした履修」がほとんどであるが、そのような学生とともに学習する公開講座の学習者がどのような学習動機をもっているのかは明らかにされていない。

2019 年度の公開講座は、6～8 月および 10～11 月の期間、週に 1 回（90 分）が全 15 回実施された。主な内容は、人体骨格模型などを使った発声の仕組みについての講義、ストレッチ、発声練習、パート練習や合唱練習であった。また希望者には、毎週の練習で積み重ねた成果をホールで披露する演奏会（12 月）の機会も与えられている。音楽学習において、人前での発表機会があることは、ひとつの演奏をつくりあげる目標になるとともに、自らの練習の過程をふり返り、今後の音楽学習の指針とするための機会となりうる。

最近 5 年間に取り上げられた曲目は、「蔵王」「ミサ曲ハ短調（モーツァルト）」「筑後川」「島よ」「ふるさとの四季」など、一般的な合唱曲として広く知られた作品が多い。音楽を専門としている学生も同時に受講しているため、より専門的な選曲をおこなう可能性もあるものの、実際は公開講座の学習者の多様なレベルを考慮した選曲となることがほとんどである。

3 研究方法

3.1 調査の目的

公開講座に参加した学習者の学習動機と学習の楽しさ、および生涯学習の持続性と積極性がどのように関連しているのかを明らかにする。手順として、後述する浅野（2002, 2006）の尺度を合唱の文脈に表現を変更して質問紙を構成し、その調査結果を因子分析・重回帰分析する。なお、質問紙には性別、年齢、達成したこと、過去の参加歴等を尋ねるフェイスシートを含んでいる。

3.2 調査対象・方法

2019 年度の公開講座に参加登録した学習者 52 名のうち、途中でリタイアした者と最後の演奏会に出演しない者を除く、40 名に対して、演奏会直前の最後の講座終了後に調査を実施した。有効な回答者は 39 名（男性 14 名、女性 24 名、不明 1 名；40 代 5 名、50 代 10 名、60 代 12 名、70 代 9 名、80 代 3 名）であった。回収率は 97.5%であった。

3.3 調査で使用した尺度

学習動機尺度：浅野（2002）の学習動機尺度を援用した。この尺度は 5 つの下位尺度（「自己向上志向」「特定課題志向」「経験関与的課題志向」「職業・専門性志向」「交友志向」）からなる。各 5 項目の計 25 項目である。

学習の楽しさ尺度：浅野（2006）の学習の楽しさ尺度を援用した。この尺度は 3 つの下位尺度（「実用的楽しさ」「多様思考の楽しさ」「知る楽しさ」）からなる。各 3 項目の計 9 項目である。

生涯学習参加尺度：浅野（2002）の生涯学習参加尺度を援用した。この尺度は 2 つの下位尺度（「積極的関与」3 項目、「継続意志」2 項目）からなる。

いずれの尺度も「とてもあてはまる」（4 点）から「全くあてはまらない」（1 点）までの 4 件法を用いた。

4 結果

4.1 各尺度の構成

学習動機尺度の 25 項目を用いて因子分析（主因子法・バリマックス回転）を実施し、固有値の大きさと解釈のしやすさから 4 因子を選択した。その後、複数の因子に負荷が高い項目、およびいずれの因子にも

高い負荷量をもたない項目を除き、因子分析を繰り返した。その結果を Table 1 に示した。第 1 因子は、浅野 (2002) の「経験関与的課題志向」と「自己向上志向」が 1 つにまとまり、「物事を多様に見ることが出来るから」「視野を広げたいから」などの自己向上を目指す項目群であったことから、「自己向上志向」と命名した。第 2 因子には「多くの人と交わることができるから」「色々な人に出会えるから」などの友人づくりを目指す項目群であったことから「交友志向」と命名した。第 3 因子には「高い専門性を身につけたいから」「自分自身が関わった活動や仕事に関する事柄を学びたいから」などの専門的な技術の習得を目指す項目群であったことから「専門性志向」と命名した。そして第 4 因子は、やりたいことを学習していたり、自発的に勉強したりするなどの自発性を示す項目群であったことから「自発性志向」と命名した。各尺度のクロンバックの α 係数は第 1 因子から順に 0.826, 0.877, 0.827, 0.695 であった。

学習の楽しさ尺度の 9 項目を用いて因子分析 (重みなし最小二乗法・プロマックス回転) を実施した。浅野 (2006) と同様の 3 因子が得られた。その結果を Table 2 に示した。浅野 (2006) を踏襲し、第 1 因子は広い視点をもったり多様な考え方ができるようになったりすることの喜びであることから「多様思考の楽しさ」、第 2 因子は新しい知識を知ることの楽しさであることから「知る楽しさ」、第 3 因子は学んだことを実際に役立てる楽しさであることから「実用的楽しさ」と命名した。各尺度のクロンバックの α 係数は第 1 因子から 0.896, 0.841, 0.778 であった。

生涯学習参加尺度の 5 項目を用いて因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を実施した。浅野 (2002) と同様の 2 因子構造を示したが、一部因子間で項目が入れ替わった。その結果を Table 3 に示した。浅野

Table 1 学習動機尺度 因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	I	II	III	IV
I 自己向上志向 $\alpha=0.826$				
11 日常的に接したことに興味をもったから	.793	-.149	-.009	-.163
10 物事を多様にみることが出来るから	.754	.040	-.124	-.061
12 ふだん、疑問に感じたことを勉強したいから	.702	-.143	.074	-.159
13 日常生活で見たり、聞いたりしたことについて学びたいから	.642	-.014	.065	-.026
8 幅広い教養を身につけたいから	.552	.084	-.009	.337
9 自分の幅を広げたいから	.514	.046	-.042	.208
6 視野を広げたいから	.473	.221	-.119	.255
15 自分の経験と知識が融合すると興味がわく	.433	.062	.220	.304
II 交友志向 $\alpha=0.877$				
2 多くの人と交わることができるから	-.115	.936	-.042	-.002
1 色々な人に出会えるから	-.164	.920	-.077	.175
3 新たな友人を作ることができるから	-.019	.829	.147	-.183
4 楽しそうな場だから	.296	.639	-.026	-.378
5 人間関係が豊かになるから	.393	.558	.006	-.083
III 専門性志向 $\alpha=0.827$				
17 高い専門性を身につけたいから	.041	.085	.853	.120
19 自分自身が関わった活動や仕事に関する事柄を学びたいから	.164	-.191	.760	.088
18 現在関わっている活動や仕事上、公開講座に参加することが必要であるから	.040	-.177	.737	-.217
16 なりたい職業や、資格のため	-.301	.324	.699	.037
IV 特定課題志向 $\alpha=0.695$				
23 ほかにやりたいことがなかったから (逆転)	.017	.126	-.094	-.683
22 義務的に勉強することが多い (逆転)	.081	.236	.105	-.671
25 興味ある分野を学びたいから	.049	.185	.057	.668
	因子間相関			
	II	.387		
	III	.097	-.033	
	IV	.142	.224	-.004

Table 2 学習の楽しさ尺度 因子分析結果（重みなし最小二乗法・プロマックス回転）

	I	II	III
I 多様思考の楽しさ $\alpha=.896$			
5 公開講座に参加して広い視点をもつことができるようになったことが嬉しい	.955	-.056	-.077
4 公開講座に参加して多様な考え方ができるようになったことが嬉しい	.905	.050	-.008
6 公開講座に参加して、いろいろな考え方を知ったことが面白い	.703	.177	.014
II 知る楽しさ $\alpha=.841$			
7 多くの人と交わることができるから	-.126	.952	-.013
8 色々な人に出会えるから	.048	.735	-.098
9 新たな友人を作ることができるから	.185	.674	.113
III 実用的楽しさ $\alpha=.778$			
3 公開講座に参加したことを現実の場面で生かせるから楽しい	.147	-.017	.979
1 自分の仕事や活動、生活が合唱に関係しているので楽しい	-.226	.012	.667
2 公開講座で学んだことが自分の仕事、生活に役立つから楽しい	-.017	-.022	.613
	因子間相関	I	II
		II	.523
		III	.111
			.027

Table 3 生涯学習参加尺度 因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	I	II
I 継続意志 $\alpha=.877$		
5 公開講座に参加して広い視点をもつことができるようになったことが嬉しい	.947	-.080
4 公開講座に参加して多様な考え方ができるようになったことが嬉しい	.864	-.014
3 公開講座に参加して、いろいろな考え方を知ったことが面白い	.718	.134
II 積極的関与 $\alpha=.894$		
2 積極的に公開講座に取り組んでいると思う	.049	.913
1 公開講座に対する意欲は高い方だと思う	-.042	.888
	因子間相関	I
		II
		.400

(2002)を踏襲し、第1因子は常に音楽と関わっていたい、できるだけ長く学習を続けたいという内容から「継続意志」、第2因子は学習への積極性や高い意欲を示す内容から「積極的関与」と命名した。各尺度のクロンバックの α 係数は第1因子から0.877、0.894であった。

以下の分析では、いずれの尺度も各因子の因子負荷量の高い項目の平均値を尺度得点として使用する。

4.2 各下位尺度得点の平均値

学習動機尺度の下位尺度得点の平均値を算出した（Figure 1）（誤差線は標準偏差。以下同様）。「自己向上志向」は平均値が3.08（ $SD=0.48$ ）と高いことから、さまざまな視点でものを見ることや、疑問に感じたことを勉強したい人が多い。「交友志向」の平均値も3.05（ $SD=0.53$ ）と高いことから、交友関係を広げたり、新しいつながりを求めたりしている人も多い。「専門性志向」は平均値が1.99（ $SD=0.74$ ）であることから、学習者は音楽の専門的な技術習得を大きな目的にしているとはいいがたい。「自発性志向」の平均値は3.56（ $SD=0.54$ ）であり、学習者は自発的に参加を決定しているといえる。

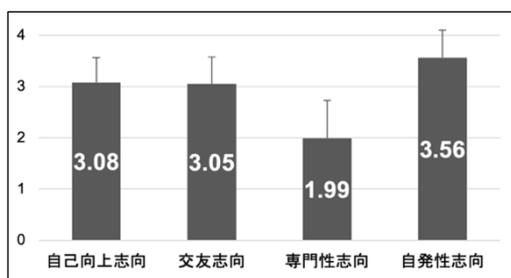


Figure 1 学習動機 平均値

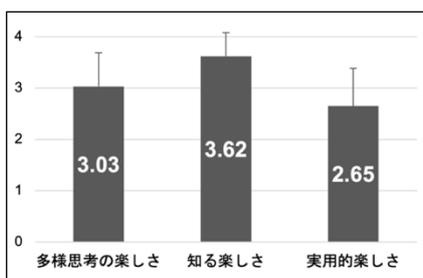


Figure 2 学習の楽しさ 平均値

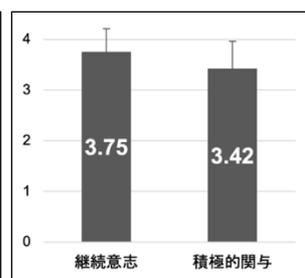


Figure 3 生涯学習参加 平均値

学習の楽しさ尺度の下位尺度得点の平均値を算出した (Figure 2)。「多様思考の楽しさ」の平均値は 3.03 ($SD = 0.66$), 「知る楽しさ」の平均値は 3.62 ($SD = 0.46$) と高いことから, 自分の考えや視点が広がったり新しい知識を得たりすることに学習者の楽しさの比重が置かれている。逆に, 「実用的楽しさ」の平均値は 2.65 ($SD = 0.73$) と他の因子よりも低く, ここで得た学びが必ずしも自身の生活や活動に生かされるものではないと考えている人が多い。

生涯学習参加尺度の下位尺度得点の平均値を算出した (Figure 3)。「継続意志」の平均値は 3.75 ($SD = 0.46$) と高いことから, 公開講座の学習者は学習を継続する意志が強く, 74%の人が 2 回以上 (最大で 13 回) のリピーターであることから, この結果は学習者の姿を反映しているといえる。また「積極的関与」の平均値も 3.42 ($SD = 0.54$) と高く, 学習者は学習に対して積極的な姿勢をもっている。

4.3 重回帰分析の結果

学習動機と学習の楽しさのどのような側面が「継続意志」と「積極的関与」に影響を及ぼしているのかを明らかにするために, まず学習の楽しさの「多様志向の楽しさ」「知る楽しさ」「実用的な楽しさ」をそれぞれ従属変数として, 学習動機尺度の 4 因子を独立変数として重回帰分析を実施した。続いて, 「継続意志」と「積極的関与」をそれぞれ従属変数として, 学習動機尺度の 4 因子と学習の楽しさ尺度の 3 因子を独立変数として重回帰分析を実施した。それらの結果を Figure 4 にまとめた。

「自己向上志向」が「多様思考の楽しさ」に有意に影響を与えていた ($\beta = .42, p < .05$)。また, 多様思考の楽しさと知る楽しさの相関が有意であった ($r = .49, p < .01$) ことから, 「自己を向上したい」という気持ち, 学習に参加することで新しい知識の習得や, さまざまな考え方に触れるという楽しさに影響を与えていた。

「専門性志向」は「実用的楽しさ」に有意に影響を与えていた ($\beta = .62, p < .001$) が, 合唱という活動の特性上, 生活のなかに実用的楽しさを求めることは難しい。ただ, 学習者が参加している別の音楽グループでの活動に役立っている可能性が考えられる。

さらに, 「知る楽しさ」が「継続意志」に有意に影響を与えていた ($\beta = .67, p < .001$) ことから, 自分を高めたり, 新しい視点でものごとを見られるようになったり, 新しい知識を得ることによって学習への継続意志が生まれている。

「自発性志向」も「継続意志」に有意に影響を与えていた ($\beta = .34, p < .05$) ことから, 自分の興味のある分野を勉強し続けたいという学習者の姿を映している。学習者の 74% が「また学習を続けよう」と 2 年目以降も参加しているということ自体が継続意志につながっていることも考えられる。

しかし, その一方で, 学習動機から「継続意志」および「積極的関与」まで矢印がひとつにつながっていく姿をみとることはできなかった。学習動機が楽しさに影響し, そこから生涯学習の持続性と積極性につながっていくようすが生涯学習参加の理想モデルであると仮定するならば, 本調査ではその理想的なモデルが確認できなかった。

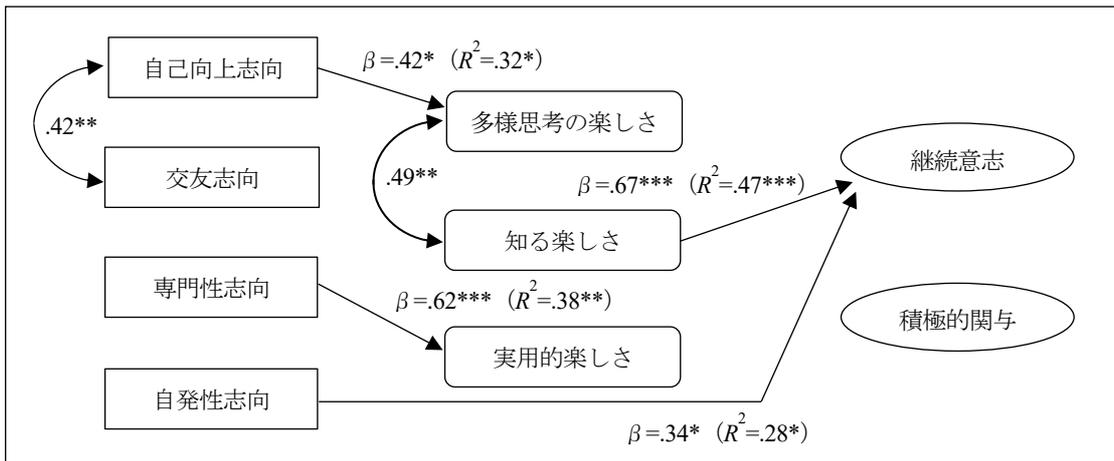


Figure 4 重回帰分析の結果 (* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$)

5 考察

合唱の大学公開講座の学習者は、多様な見方ができるようになったり、新しい知識や知る喜びを得たりするなど、「自己向上」に対しての欲求は達成されていたことから、本公開講座の意義として「学習に参加し、新しい知識や経験を身につけることで、音楽に限らずさまざまな状況に対応できる知恵や人生の熟達につながっていく」ことがあげられる。公開講座に参加して達成したこと（フェイスシート）の回答を集計すると (Figure 5), 76.9%が「心が豊かになった」、64.1%が「音楽について深く学ぶことができた」、66.7%が「音楽を通して心が動かされる経験をした」と回答しており、確かに合唱の活動によって音楽的な学びやポジティブ感情を得ることは大いにあることである。しかし、その他（自由記述）として、「社会に出てからも学ぶことは楽しい」「公開講座は学ぶことのできる貴重な機会である」「歩ける間は毎年参加するという目標をもっている」という声があったことから、学習者が築いてきたこれまでの豊かな経験に、新しい視点をもたらしたり、心地よさや快感を得たり、「まだこのような経験に触れるチャンスがあったんだ」という驚きや満足感、「頑張ったな」という感情を得る機会の創出となっている。

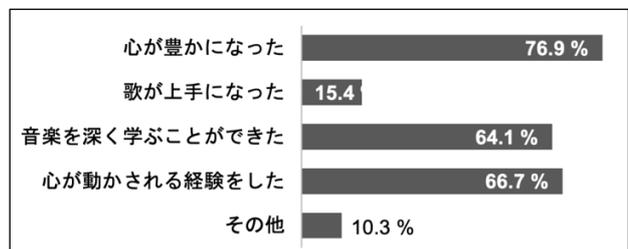


Figure 5 公開講座に参加して達成したこと

生涯音楽学習では、生涯学習と言えども音楽学習であるがゆえ、どうしても音楽の技術習得が目的となりやすいが、丸林 (1993) が社会教育における音楽教育の課題として指摘するように、生涯音楽学習としての大学公開講座においても成人の学習者が学び合うことによって自己形成をおこなう「相互主体形成」の視点が不可欠である。とりわけ合唱という活動は、他者とともに「ひとつの生命的時間を共有すること」(宮内, 2009, p.168) とつながっていく。参加者の「自分は専門的に学んだことはないが、演奏に参加してみたい」「学生さんの頑張りに支えられた」「学生さんによく教えてもらえた」「若い力をもらった」という声からも、専門性をもつ学生とともに「ひとつの音楽を作り上げる」という目的に向かっていくという方向性が認められる。また、ただ学ぶだけではなく、成果を発表するための演奏会への参加の機会が与えられており、音楽の専門的な技術を持ち合わせていない人が「自分も音楽活動や演奏会のステージに参加できる」機会の創出となっている。牧野 (2009) は高齢者の学習について、「他者から承認を受けることで自己を生かしていこうとすることから、自ら社会に働きかけ、自分の満足を得ようとすることで、社会に影響力を及ぼしていく、社会的な能動的アクターへと移行してきている」(p.75) という結果を示しており、このような機会に参加して知的満足を得て、社会参加を果たし、自己を生かしていくことで社会とのつながりを保っている側面もある。

その一方で、学習者の学習動機としての「交友志向」の平均値は 3.05 と高かったにもかかわらず、どの学習の楽しさ因子にも影響を与えていなかった。このことについて、本公開講座が学生の授業に参加する

形態で行われるため、学生と公開講座の学習者の関わりが多くなく、個人レベルで学習者間での交流があったとしても、組織的に交友志向にはたらしめかける取り組みはほとんどないという特質から、学習の楽しさや生涯学習への持続性と積極性は交友志向からの影響を受けていないと解釈できる。このことから、公開講座が授業に付加されているということが、学習者の交友志向にとってはマイナスに働いている可能性があり、「積極的な関わりはないが、一緒の場で活動はしている」という、活動の形式化が課題といえる。だが、公開講座の学習者のなかには、音楽の専門性をもった学生とともに歌えることを楽しみにしている人もいる。課題の解決に向けて、学生と公開講座の学習者がそれぞれのグループとして関わるのではなく、どの学習者も「自分から他のグループ（種類）の学習者と積極的に関わる」といった雰囲気を用意することが必要である。主体的に学習に取り組むためには、学習内容の深化だけではなく、他者と積極的に関わることでできる雰囲気づくりも重要である。学習の場の雰囲気の醸成と課題の解決を目指して、学生は音楽の専門性を生かして公開講座の学習者と関わり、公開講座の学習者は人生の熟達者としての知恵や経験を生かして学生と関わるができるように、多様な学習者を含んだ集団における指導のあり方を検討し、学習方法・学習内容を変化させていく必要がある。

6 結論・今後の課題

本研究は、大学の授業に公開講座が参加するという特殊な形態をもつ生涯音楽学習の一事例の結果であるため、一般的な理論としての確立はさらなる研究の蓄積が必要である。しかし、ひとつの場で、異なる立場の人たちと生涯学習をおこなう際に課題となる点を指摘した。異なる立場の人とともに学習する際には、生じる課題も多いが、これまでになかった新しい視点を得られるなどの成果も大きい。今後は、さまざまな立場の人が参加する学習の場において、相互主体形成をおこなっていくための工夫や、相互主体形成の影響によって生じる学習者の変容についても研究をおこなっていききたい。

注

- (1) 川村（2020）は、個人の経験を枠づける意味のまとまりとして、他者や事物との相互関係のもとに社会的・文脈的に生じる「物語（narrative）」を音楽学習にも適用して捉えている。
- (2) 文部科学省ウェブサイト「開かれた大学づくり」https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/daigaku/index.htm
- (3) 文部科学省「平成29年度 開かれた大学づくりに関する調査研究 調査報告書」（平成30年3月）
https://www.mext.go.jp/content/20200929-mxt_chisui01-100000171_1.pdf

引用・参考文献

- 浅野志津子（2002）「学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程—放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から—」『教育心理学研究』第50巻，pp.141-151
- 浅野志津子（2006）「学習動機と学習の楽しさが生涯学習参加への積極性と持続性に及ぼす影響—放送大学学生の高齢者を中心に—」『発達心理学研究』第17巻，第3号，pp.230-240
- 石川裕司（2009）「成人の音楽学習者の支援に関する一考察」『音楽学習研究』第5巻，pp.1-10
- 伊藤真・別府祐子・三村真弓・吉富功修（2014）「生涯音楽学習における学習動機が積極性と継続意志に及ぼす影響—アマチュア混声合唱団の活動を事例として—」『音楽学習研究』第10巻，pp.1-10
- 川村有美（2020）「生涯音楽学習における音楽的意味と学びの編み直し」『音楽文化の創造（CMC）電子版』Vol. 13，pp.1-5
- 堀薫夫（2012）『教育老年学と高齢者学習』学文社
- 牧野篤（2009）『シニア世代の学びと社会』勁草書房
- 丸林実千代（1993）「生涯学習社会における音楽学習の機会提供はどうあるべきか—『コミュニティ形成』を目指した音楽学習の事例の検討をとおして—」『音楽教育学』第23巻，第2号，pp.36-39
- 宮内勝（2009）「演奏の現象学」『東京芸術大学音楽学部紀要』第34集抜粋，pp.157-215